

令和元年6月19日現在

機関番号：32604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K03123

研究課題名(和文) 中世後期ロンドンの「外国人」と都市社会

研究課題名(英文) 'Aliens' and Urban Society in Late Medieval London

研究代表者

上野 未央 (Ueno, Mio)

大妻女子大学・比較文化学部・准教授

研究者番号：20456271

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、中世ロンドンを、都市の「外部」との関係性の中で考察するための第一歩として、「外国人」(alien)とされた人々を取り上げた。まず、中世ロンドンの「外国人」に関わる研究動向を整理し、その結果を、研究会や国際学会において発表した。そのうえで、代表者は、15世紀ロンドンの「外国人」の出身地・居住地・職業などの概要をまとめて発表した。また、ロンドン市立文書館において、14～15世紀ロンドンの「外国人」が残した遺言書を収集した。分担者の佐々井真知氏は、同職ギルド(同業者組合)が「外国人」とどのように関わったのかを考察するため、金細工師ギルドを取り上げ、当該ギルドの規約の分析を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年の中世ロンドン史の研究は、共同体の内部に関心が向かっており、海外との関係という視点が弱かった。本研究は、「外」から中世ロンドンをとらえなおすという視点を、中世ロンドン史の研究に提供した。また、日本ではほとんど取り上げられることのなかった、中世ロンドンにおける「外国人」に関する研究動向を紹介することができた。さらに、中世ロンドンへ移動してきた人々についての本研究の成果は、近世～現代の移民研究にもつながるものであり、社会的意義があると考えられる。

研究成果の概要(英文)：As the first step in understanding medieval London from outside the city, this study considers those who were classified as 'aliens' (a general term used for foreigners) in the Middle Ages. This study first considered trends in previous works, which I presented at seminars and international conferences. Next, I presented a rough picture of 'aliens' in London - where 'aliens' came from, where they lived in London, what they did for a living etc. I also collected the wills of 'aliens' in London Metropolitan Archives. This work was a collaboration with Dr Machi Sasai, whose analysis of the Goldsmiths' Company's ordinances, which provides additional insight into how a London guild had formed their relationships with 'aliens'.

研究分野：中世後期イギリス史

キーワード：都市史 ロンドン史 移動 アイデンティティ 他者 外国人

1. 研究開始当初の背景

(1) ヨーロッパ史におけるロンドンという都市の重要性は日本でも認識されてきたが、中世のロンドンに関しては、日本では研究が十分に行われてきていなかった。そのため、研究代表者と分担者は、日本におけるロンドン史研究を進展させるため、2014年に中世ロンドン史研究会を立ち上げ、研究会を行ってきた。

(2) イギリスにおける中世ロンドン史研究に目を向けると、同職ギルドやフラタニティ(兄弟会)といった諸団体の活動実態を具体的に明らかにする研究がさかんに行われており、都市共同体の「内部」へと研究は深化してきている。しかし、中世のロンドンが、北西ヨーロッパにおいてヒトやモノの行き交う中心地の一つであったことを考慮するならば、共同体の「外部」から、ロンドンをとらえる必要があるのではないかと考えるようになった。そこで、「外」との関連性の中で中世ロンドン社会をとらえ直すための第一段階として、「外国人」とされた人々を取り上げることとした。

2. 研究の目的

本研究では、14～15世紀のロンドンにおける「外国人」を取り上げる。「外国人」(alien)とは、イングランド以外の土地からロンドンにやってきて、一定期間滞在あるいは定住した人々をさして、中世後期のイングランドで用いられた語である。そのような人々を対象とすることで、中世の都市社会と、「外」から来た人々がどのような関係性を持ったのかを明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

第一に、中世都市と「外国人」に関する研究動向を把握し、どのような問題点があるかを整理する。第二に、ロンドンにどのような「外国人」が暮らしたのか、その概要を整理する。第三に、史料を用いて、ロンドン社会と「外国人」との接点を明らかにする。具体的には、同職ギルドの記録を史料として利用し、ロンドン市民の「外国人」への対応について検討する。また「外国人」が遺した遺言書を収集、解読し、「外国人」がロンドンでどのように生きたのか、どのような人々と関わっていたのかということ考察することとした。このような方法をとることで、ロンドン社会と「外国人」とがどのように接したのか、その一端を明らかにすることを試みた。

4. 研究成果

(1) 「外国人」に対する中世ロンドン社会の反応

中世ロンドンの「外国人」研究の先駆けとなったのは、1969年のS.スラップによる研究であった[S. Thrupp, 'Aliens in and around London in the Fifteenth Century', A. E. J. Hollaender and William Kellaway (eds.), *Studies in London History Presented to Philip Edmund Jones*, (London, 1969), pp. 251-72]。スラップは、15世紀半ばに導入され「外国人」に課された特別税の記録や遺言書を史料として利用した。そして、スラップは、「外国人」に対する市民たちの反発や暴力があったことに言及しながらも、「外国人」を友好的に受け入れた15世紀ロンドンの都市社会を描き出した。

2010年以降、「外国人」研究はイギリスであらためて注目を集めているが、近年では、ロンドンの人々と「外国人」との友好的な関係を強調したスラップの見解は否定される傾向にある。近年の研究の多くでは、中世ロンドンにおいては「外国人」への敵意が継続的にあったことが前提とされる[上野未央「中世後期ロンドンにおける「外国人」をめぐって」『大妻比較文化』17(2016年) pp. 35-54]。

しかし、研究を進める中で、研究代表者は、ロンドンの人々と「外国人」との関係を友好・敵対という二項対立で理解し、それを前提として議論することは避けるべきであると考えられるようになった。「外国人」がどのようにロンドン社会と関わっていったのかということは、「外国人」の出身地や職業によって大きく異なると考えられる。また、ロンドンの人々や共同体(都市当局、同職ギルド、教区など)の反応も、時と場合によって異なるところだろう。さらに、誰が「外国人」とされたのかということも、史料によって、また時と場合によって異なってくるのである。

そのため、中世ロンドンの人々と「外国人」との接点について考える際には、「どのような場合に、どのように相手に接したのか」と問うことが重要なのではないかと考える。友好か敵対という単純な図式を前提とするのではなく、事例研究を積み重ねることが、「外国人」と都市社会との接点について明らかにすることにつながると考える。研究動向を検討することで、このように研究の方向性が明確化された。

(2) 中世ロンドンにおける「外国人」の多様性

先行研究の動向を検討する中で明らかになったことの2点目は、「外国人」としてひとくりにされてきた人々の多様性を指摘する研究が増加していることである。たとえば、ロンドンでドイツや低地地方の出身者が結成したフラタニティ（兄弟会）に着目した研究がある。この研究では、当初は「ドイツ・低地地方出身者」のための単一の団体だったものが、より細かな出身地域ごとに、異なる複数の団体へと分かれていった可能性が指摘された〔J. Colson, 'Alien Communities and Alien Fraternities in Later Medieval London', *London Journal* 35-2 (2010), pp. 111-43〕また、個別の「外国人」に着目した研究も行われており、それらの研究からは、「外国人」たちの複雑なアイデンティティが明らかになっている。

近年公開されたデータベースと、そのもとになったイギリスでのプロジェクト England's Immigrants 1330-1550: Resident Aliens in the Late Middle Ages (<https://www.englishimmigrants.com/>)も、「外国人」の多様性に目を向けるという一連の研究動向の中にあると考えられる。中世の「外国人」といえば、従来、ハンザ商人ら富裕な「外国人」に関する研究が主体となってきた。それに対してこのプロジェクトでは、多様な職業の人々（職人、使用人など）や女性も対象とし、約64000件の「外国人」情報をデータベース化した。後述する理由から、このデータベースの利用には注意が必要であるが、研究を進める上で有効な情報源である。

（3） 中世後期ロンドンの「外国人」 - 出身地・居住地・職業

研究動向について整理した結果を受け、ロンドンに居住した多様な「外国人」が、どこから来て、どこに暮らし、何を職業にしたのか、ということ整理した。それが、個別事例を検討していくための前提となると考えたためである。ロンドンに暮らしした「外国人」については、（2）で言及したデータベース（England's Immigrants 1330-1550）を利用した。データベースから、15世紀ロンドンに居住した17000件を超える「外国人」のデータが得られた。その大部分が、「外国人」特別税の税額査定の際に記録されたものである。税額査定記録には、人名、居住地、職業、査定税額などが記された。

この約17000件のデータからは、西ヨーロッパの様々な地から、人々がロンドンへやってきていたことが分かったが、内訳をみると、イタリア諸都市出身者、フランス諸都市出身者、ドイツ・低地地方の出身者、スコットランド出身者、それ以外の人々に大別されるといえる。中でも最も多く確認されたのはドイツ・低地地方出身者であり、市内中心部やテムズ川沿いに多く居住していた。職業としては、商人や職人、ビール醸造業者などが記録されている。またドイツ・低地地方出身者の中には女性も多く記録されており、家族でロンドンに居住した例が多かったと推察される。一方、イタリア出身者の多くが商人と記載されており、単身であることが多く、ロンドン市内中心部の富裕な市区に居住した。史料上の制約から、ごくおおまかな傾向を知るにとどまったが、15世紀のロンドンにおける「外国人」の出身地や居住地について整理した。その結果は中世ロンドン史研究会にて報告し、その際の議論を取り入れて、2018年4月に九州西洋史学会大会にて口頭報告した。

（4） 先行研究の問題点

上記（3）の研究を進める中で、データベース（England's Immigrants 1330-1550）には歴史学の専門的研究に利用するには注意が必要であることが明らかとなった。データベースに、現代の用語と、史料上の語とが混在しているためである。したがって、データベース上の用語が現代のものなのか中世の（史料上の）ものなのかを確認しながら進める必要が生じ、想定した以上に、ロンドンの「外国人」分布についての整理を行うのに時間がかかった。しかし、データベースに示された個々の「外国人」情報には元となる史料情報が詳細に示されており、信頼できるものである。今後、このデータベースの限界をあらためて整理して、他の史料と合わせて利用していきたい。

また、研究を進めていくと、史料に関わる問題点も明らかになった。「外国人」研究に用いられてきた史料としては、「外国人」特別税の査定記録がまず挙げられ、多くの研究で利用されてきている。しかし、この税額査定記録は、時期や場所によって、あるいは査定した役人の判断によって、誰をどのように記録するかが異なっていたことが分かった。また、ロンドンでは、市区ごとに「外国人」名が記されたが、時期によっては複数の市区をまとめて記録したことがあった。そのような場合には、実際には誰がどの市区に暮らししていたのかは分からなくなってしまう。そのため、税額査定記録からは、ごくおおまかな「外国人」の分布は分かるものの、長期間に渡る動向は分からない。先行研究では、特定の年の税額査定を利用したものはあるが、税額査定記録という史料の有効性と限界について、十分に検討されてきたとはいいがたく、この点については再検討する必要がある。

また、「外国人」特別税を免除された人々が多くいたことにも留意しておきたい。たとえばハンザ商人は、「外国人」特別税を免除されたため、税額査定記録にはほとんど記録されていない。今後は、ハンザ商人など、「外」からやってきてロンドンに拠点を持った人々についても検討したい。その際には、「外国人」研究に利用されてきた他の史料群〔佐々井真知「中世後期ロンドンの「外国人」に関する史料について」『中部大学人文学部研究論集』37号（2017年）pp. 71-91を参照〕も利用していく必要があるだろう。

(5) 金細工師ギルドにおける「外国人」への対応

上記(1)(2)で明らかになった先行研究の動向から、本研究課題では「外国人」職人を多くかかえた金細工師の同職ギルドの対応についてまず検討していくこととなった。金細工師ギルドは、ロンドンでも最も裕福なギルドの一つであり、ロンドン市長も多く輩出し、都市の政治にも影響力を持った。ロンドンには「外国人」金細工師が多く存在したことから、市民の「外国人」に対する反応を検討するにあたって有効な事例研究となる。また、現存する中世後期の記録(議事録や会計記録、規約など)が刊行史料として利用可能であるという利点もあった。

以上の理由から、研究分担者の佐々井が、1478年にまとめられた金細工師ギルドの規約を、「外国人」への対応という視点から検討した。その結果、「外国人」金細工師は、基準に満たない材料を用いた製品の製作や、彼らが雇用されることによるイングランド人の雇用機会の減少などという点で問題視されていたことが読み取れた。このような状況への対策として、金細工師ギルドは、「外国人」は監事の目の届くところでのみ働くこととした。製品の製作や販売を監視しようとしていたといえる。次に、「外国人」の職人向けの宣誓文が残っており、ギルドは彼らを監督下に置いたうえで活動を許可していたことが分かる。また、「外国人」金細工師に、ロンドンの親方の下で職人として働くという、ロンドンでの就労が義務付けられたことも規約から指摘できる。「外国人」を親方の監督下で職人として働かせることで、金細工の技術を引き上げることを目指したのではないかと推察される。さらに、雇用の問題への対応として、イングランド人や「外国人」の金細工師が職人や徒弟を雇う場合はイングランド人を優先することとされた。以上のように、規約には「外国人」への対応策とみられる項目が複数ある。これらの項目は、ロンドンの金細工師ギルドが「外国人」を金細工師として受け入れることを前提としていたことを示しているのではないかと推察される。「外国人」が受け入れられた背景の検討は今後の課題であり、ロンドン側・「外国人」金細工師側の双方の状況を考慮して検討していきたい。

以上のように、規約を用いた考察からは、ロンドンの商工業者と「外国人」とのかかわりの一側面が明らかになったといえる。規約に加えて同ギルドの議事録も史料として用いた分析を、論文として発表する予定である。

(6) 「外国人」の遺言書

上記(3)の研究と並行して、「外国人」とされた人々の遺言書の収集を行った。当初、「外国人」特別税の税額査定において記録された人々の遺言書を探す予定であった。しかし、人名の綴りが史料によってかなり異なっていることが判明した。そのため特別税の記録に出てくる人名から、同じ人物の遺言書を探すことは想定した以上に困難であり、時間がかかった。

そのような中でも、先行研究を参考にしながら、ロンドン司教代理裁判所の14・15世紀の遺言検認記録と、「外国人」特別税の税額査定の方々に記録されている人々を確認し、イタリア諸都市出身者27名、ドイツ・低地地方出身者4名の遺言書を収集することができた。これらの遺言書には、家族への遺贈に加え、故郷の財産への言及や、ロンドン市内で「外国人」と関わりの深かった教会への言及がみられる。ロンドンに移動したのちも、「外国人」たちは故郷とのかかわりを大切にしていたことが推察される。

また、ロンドン司教代理裁判所の遺言書検認記録のインデックス(遺言者氏名および遺言内で言及される教区名を示した刊行史料)を確認すると、大陸諸都市に言及した遺言書があることが分かり、それらの遺言書をリストアップした。そのうえで、ロンドン市立文書館において、写本のマイクロフィルムから、該当する箇所を複写し、2018年度までに88人分の遺言書入手し、その多くがイングランド以外の都市出身者の遺言書であることが確認された。これらの遺言書の一部を史料として利用した論文を現在準備中である。ロンドンには他にも遺言の検認を行った裁判所があるため、それらの検認記録についても引き続き調査していく。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 7件)

上野未央「シンポジウム報告 15世紀ロンドンにおける「外国人」- 出身地・居住地・職業」(九州西洋史学会2018年度春季大会シンポジウム「中世後期ロンドンの「外国人」と都市社会」)、『西洋史学論集』56号(2019年) pp. 4-8. 査読なし

佐々井真知「シンポジウム報告 中世後期ロンドンの金細工師ギルドと「外国人」」(九州西洋史学会2018年度春季大会シンポジウム「中世後期ロンドンの「外国人」と都市社会」)、『西洋史学論集』56号(2019年) pp.9-13. 査読なし

田村理恵「シンポジウム報告 中世後期ハルの交易 「外国人」商人とヨークシャーの商人」(九州西洋史学会2018年度春季大会シンポジウム「中世後期ロンドンの「外国人」と都市社会」)、『西洋史学論集』56号(2019年) pp.14-18. 査読なし

花田洋一郎「シンポジウム報告 フランス中世史の立場から」(九州西洋史学会2018年度春季大会シンポジウム「中世後期ロンドンの「外国人」と都市社会」)、『西洋史学論集』56号(2019年) pp.19-21. 査読なし

藤内哲也「シンポジウム報告 中近世イタリア都市史の立場から ヴェネツィアの「外来者」・マイノリティ」(九州西洋史学会 2018 年度春季大会シンポジウム「中世後期ロンドンの「外国人」と都市社会」)、『西洋史学論集』56号(2019年) pp.22-25. 査読なし

梁川洋子「研究ノート 中世後期の港湾都市ブリストル」『関西大学西洋史論叢』20号(2018年) pp.34-47. 査読なし

佐々井真知「中世後期ロンドンの「外国人」に関する史料について」『中部大学人文学部研究論集』37号(2017年) pp. 71-91. 査読なし

[学会発表](計 15件)

Mio Ueno 'Aliens in Late Medieval London', The 1st British-East Asian Conference of Historians (国際学会), 2018年9月

上野未央「中世後期ロンドンにおける「外国人」 - 最近の研究動向から」ヨーロッパ中世史研究会 2018年5月

上野未央「15世紀ロンドンにおける「外国人」 - 出身地・居住地・職業」九州西洋史学会 2018 年度春季大会シンポジウム「中世後期ロンドンの「外国人」と都市社会」2018年4月

佐々井真知「中世後期ロンドンの同職ギルドと「外国人」 金細工師を中心に」九州西洋史学会 2018 年度春季大会シンポジウム「中世後期ロンドンの「外国人」と都市社会」2018年4月

田村理恵「中世後期ハルの交易 「外国人」商人とヨークシャーの商人」九州西洋史学会 2018 年度春季大会シンポジウム「中世後期ロンドンの「外国人」と都市社会」2018年4月

花田洋一郎「フランス中世史の立場から」九州西洋史学会 2018 年度春季大会シンポジウム「中世後期ロンドンの「外国人」と都市社会」2018年4月

藤内哲也「中近世イタリア都市史の立場から ヴェネツィアの「外来者」・マイノリティ」九州西洋史学会 2018 年度春季大会シンポジウム「中世後期ロンドンの「外国人」と都市社会」2018年4月

田村理恵「中世後期ヨークシャーの「外国人」商人 ハルでの交易を中心に」中世ロンドン史研究会 2017年10月

佐々井真知「中世後期ロンドンの同職ギルドと「外国人」 金細工師を中心に」中世ロンドン史研究会 2017年10月

上野未央「15世紀ロンドンにおける「外国人」 出身地・居住地・職業」中世ロンドン史研究会 2017年10月

田村理恵「14世紀ハルの「外国人」」中世ロンドン史研究会 2017年3月

佐々井真知「中世後期ロンドンの「外国人」に関する史料について 現状と展望」中世ロンドン史研究会 2017年3月

上野未央「中世後期ロンドンにおける「外国人」に関する研究動向と問題点」中世ロンドン史研究会 2017年3月

梁川洋子「中世後期の港湾都市ブリストル」中世ロンドン史研究会 2016年10月

佐々井真知「ロンドンの市長裁判所の史料に見る中世後期の都市社会 外国人に注目して」中世ロンドン史研究会 2016年10月

〔図書〕(計 0件)

〔その他〕

中世ロンドン史研究会の開催

- 2016年10月 研究報告 佐々井真知、梁川洋子
- 2016年12月 読書会
テキスト1 Malcolm Richardson, *Middle-Class Writing in Late Medieval London* (Abingdon, 2016), chapter 4 報告者 古城真由美
テキスト2 Derek Keene, "Medieval London and Its Region", *London Journal* 14 (1989) 報告者 上野未央
- 2017年3月 研究報告 上野未央、佐々井真知
- 2017年10月 研究報告 上野未央、佐々井真知、田村理恵
- 2019年2月 読書会
テキスト Christian D. Liddy, *Contesting the City: The Politics of Citizenship in English Towns, 1250-1530* (Oxford University Press, 2017) Chapter 1, Chapter 2.
Chapter 1 報告者 田村理恵
Chapter 2 報告者 佐々井真知

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：佐々井真知

ローマ字氏名：Sasai Machi

所属研究機関名：中部大学

部局名：人文学部

職名：講師

研究者番号(8桁)：90635369

(2)研究協力者

研究協力者氏名：田村理恵

ローマ字氏名：Tamura Rie

研究協力者氏名：花田洋一郎

ローマ字氏名：Hanada Yoichiro

研究協力者氏名：藤内哲也

ローマ字氏名：Tonai Tetsuya

研究協力者氏名：梁川洋子

ローマ字氏名：Yanagawa Hiroko

研究協力者氏名：古城真由美

ローマ字氏名：Kojo Mayumi

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。